き遁るるの状となりて以て朝鮮勢と誘きるを申砦ず軽鋭して謀なれものゆゑ以為敵實ゑ遁るるぐぞとして江を渡つて追討むとし京畿の監司權徵も申砦と一致なれど金命元も禁ぜる事能はず是の日韓應寅も著陣し来る衆軍を以て追討むとし應寅ゑ率る所の者皆江邊の健兒武士とゑふ日本うても昔と同じふ〻北虜女直と近くして備ゑ戦陣ていと云たるゑ同じふ〻の形勢とも諸じたる者どもなれど應寅ゑ告て云軍士遠く来て羅弊たるゑ尚まず食せず器械まず整らず後軍の兵も来て揃るんば且敵の情偽もまず知れざれば頼くハ少く休息あて明日勢ひを觀て進〻戦それとも云ひけもど



も應寅ハこのゝる塲ゑ軍支と押留るは曲事なりとて其者と斬て戒めるる金命元ハ應寅ゑ新〻る國ゑの命を承け来て自己の差図と受る事勿れとの事なる故ゑ不可を知るると雖も敵て云くびる別将ハ劉克良ハ年老て兵ゑなれるしじ加めて言ふ軽〻と〻進むづ〻べと申砦怒て斬らむとん克良云我髪と結朝鮮の小童ハ髪をつゝと組て長く後ろゑ垂れ元服の時結髪一又総ドて早年と結髪と云ふ てよりも軍陣ゑ從ふ豈死を避るを以て心とせむや云る所以の者ハ忍くハ國事と誤らむ耳として憤〻〻して外ゑ出て其手勢と率ゐて真先ゑ渡る朝鮮の軍勢共進むして既ゑ險隘の地ゑ入る倭軍

果して精兵と山の陰に伏せ置き一時に俱に起立し朝鮮の軍勢奔走潰ゆ劉克良馬より下りて地上に座して此吾死ぬる所也と寛て敵數人を射倒しその身も終に討れ人々申碎も亦討死し軍兵共奔つく江岸に至れども渡る事と渉び岩石の上より自ら江に入る者合し大風に木の葉の乱れ飛ぶが如し其まゝ江に投ぬるに及ばざる者共も敵後ろより長刀と奮ひてこれを斫る首匍匐双を受て敢て手向者ハ無りけり金命元韓應寅江北より此軍を望見て氣を褒ふ高山君朴忠侃折ふし此軍中に在り馬に騎て真先に走りたれバ諸人是を見て以為金命元



かなりと皆云元帥走りたるよし呼ばれ諸軍の江灘を守り居る者共聲に應ずて呼ばれども我先にと散ず失せぬと金命元韓應寅ハ行在とさして引還しけれども國王よりも其罪を問ひ京畿の監司權徵を加平郡に入て乱を避さるべ日本勢いよ〳〵勝に乗じて西を指て攻下りなるく拒ぎ止むべきやうハなかりける

加藤清正入咸鏡道樹西王子之事

日本去程に加藤清正は安城駅より小西里田と立分れ咸鏡道に志し安城の居民撫育し此者小果内せさせて押行けるに是より先きに和学士詞和学清学漢学蒙古学有り咸廷虎と云者

生捕是と通詞として諸軍と競て京城を出て十三日目小咸鏡道の指口安邊に着陣し茲にて鍋島と待合せ五月十六日加藤清正鍋島直茂両勢共に安邊を打立て三日目小長橋に陣を取る是より清正八千勢一萬を引率して老里峴を踰え鉄嶺の北に出て日に行事若干里勢ひ恰も海潮の涌くが如し一つの處に北道の兵使大軍を卿ね来て海汀倉と云處にて確と行遇たり北兵ども射騎に長ドたれば矢ぶくまを作て散々に射る

（注）國雑畧曰按朝鮮屬南府縣民皆慶長枝在馬又曰平安咸鏡二道接靺鞨俗尚弓馬と云て同書に虜之鏡二道北界に近界に靺鞨八女直の古名女直唐為黒水靺鞨

和軍小白む處を騎馬の北兵一度に吐と駈け立る森本儀大夫井上庄九郎一番に槍を入れ戦ひ暮るの日巳に黄昏に及び清正も戦ひ屈し兵を引て一村に屯し北將又士卒を引率し取圍むで夜討ともする此處に大倉あつて米穀多く籠置るれば清正倉の中に俵米を取運ばせ積て雙び其蔭に鉄炮を設ちくれば透間も無き程に立比たる北兵共さんざに打ちくれ遂に敗し山上に引退く其夜清正敵陣の廻に小兵卒を伏置既に未明に及びくる比四方より鉄炮を放ちく攻入るしのば北軍一さくもせず奔走し清正の兵士追詰て討取けり北將も殺し畫て鏡城に逃込くと

清正追つ懸て悪しくつせび攻寄せ屏際に着くと等
しく諸勢乗込切崩迫くる北兵共散々に討なされ北将
も此震々討れしハ遂に鏡城も攻落けり斯て清正
ハ晝夜と名たび押行くる程に都城と立て六十八日目に
會寧と云る四里（朝鮮の四十里）こそ城と云處に著きぬる
扨朝鮮の王子ハ日本勢と怖れて會寧迫落来て城に入
て暫くもたゝかふ此會寧ハ朝鮮にて流罪人の居處
にて方三里（朝鮮の三十里）の廣野あり其れに山あり石壁を高く
築き城の如くに作て置て城の流人と謀め置廣野
に粟稗ホの雑穀を作て渡せしなる（朝鮮國にて流罪に絶島定配極辺



遠寓なる云科あり（右の内極辺と云ハ咸鏡道鍾城等と云へるもの是なり）彼流人どもと徒黨をして
王子ハ此城中の者共に敵なる幸れ今こゝに来れを搦に
して日本人に渡して年来の恨こゝと晴さむと議しなる會
寧の吏も衆にたゝめらるゝ忽ち心変して清正の陣に
使を遣して王子を搦て渡さむと云越しなれハ清正
大に喜び其夜の未明に陣處を打立ち常に秘蔵せし駿月
毛と名ばかりなる名馬に乗て真先に駆けれバ我一に後れ
じと逸足出して馳せくらふて行程四里の間を只一瞬
に駆付なる城中にハ門と打ち静まり居たるくれハ清正
美濃部金大夫に書翰を認めさせて王子を渡すべき旨と

云遣しくる會寧の吏よりと返簡より王子を渡らべし諸人の命を助け所領を賜るべし且城中糧盡て王子といへども二三日口中の食を断て糞くハ糧餉の支度なくて王子をるべしと云送りて清正再答に條々聞届けくて明卯の刻小勢を以て城中へ入るべき由云越しくて清正の老臣共評議さて若し敵の謀計にて大將を討取らむとの手段にてやあらむ又左なくとも案内をも知らざる異國の城中へ大將の小勢にてうかん事思慮なきに似たり所詮誰にても清正かわりと名乗て王子を請取べしと云ひくれば清正聞て何ぞもの申處一理ありと云へども吾日本を出しより骸を朝鮮の苔に埋て國王を討取るべしと思ひ定めく渡海せし處幸ひに此處にて王子に追付たり今一命を惜しみ手延にして暮王子を取逃し他人の手に渡しるバ無念の至りなり敵偽りて吾を欺き付むとも朝鮮の弱兵何程の支へ有らむ何ほども孤疑なる支なりしとて糧餉の支度せざるべ究竟の勇士共に餐膳酒肴など色々饗應の具を持ちせ六十餘人後人に仕立置清正ハ近習十五六人を従へ城中へ入るに入て至て裏の体と見るに長七八町程にして廣さ六十間も有らむとおぼしき馬場あり其傍に館舎ありて王子これに居るに清正此處に至りて對面

あわ拝答の礼終りて膳を供へ兼て相図の通り士卒等弁
當よりとりて椀折敷其外の器物を一人る一色で持せ六
十餘人迄入りたる王子る附添ひ居たる者共らしる驚
き騒立ち王子を討でと心得半ばと驚て清正を射むと
清正ら如何ら不制しとぶれども言ハ通ぜず士卒共
聲々る喚きる程猶進み近づきて今ハ危く見えるる清
正きつと思案を巡らし異國ら印章を以て約をしと云
夏あわと思ひ出し遂袋より印を取て出し彼の印判と低
る貼し一人づる與へしば其意通じるるかや是て静
まり皆矢を逃して礼となりる清正危き場を通れて



其後家来の者共らも度々語られるは日本にて數度戦
場る出るとも云へ此程の危難る逢ハず會盟る印章を
用ゐるとぶふ夏を知らぬんバ大死とぐうはるでと云
ふ清正ハ王子其外の者共と鏡城る籠め置き
警固の士卒を残し是を守らせ隨分饗應らべき旨申付
置き猶北東さして押行路々の城邑残らなく攻落し放火
して勇猛を示し朝鮮の國民清正を鬼上官と呼て怖れ
操期會して春秋二度宛船軍の練兵を専らし水
攻戦の修練を敵船と囲
はしる國民清正の調伏と云ひるる
深く怖れる故と勇猛を
入る所謂女直ハ寒國して北ハ七月中旬なるる霰降り
朝鮮の東北極女直界迄攻

風雨烈しくして人々の此所にて後藤と云つる通詞を一人生捕りて此者は元来日本松前の者なりしが漁船に乗て悪風に漂され思ひも此處に漂着し既に二十年を経たり蝦夷志に廷尉去此而踰北海と云考るに義経も蝦夷に女直の奴児干に至られたるとゝへば女直男の朝鮮の東北極咸鏡道と蝦夷と若干里隔るとも海上直矩は差わさし成べけれバ松前より漂著せしも左も有べき也因て女直口朝鮮口を自由につかひ分れバ能き通詞なりとて是と郷導として其名を後藤次郎と改めさるる後藤云ふ此處より天氣快晴なる時坤の方に當て日本の富士山近く見えけるとも或説富士はてハ有べうらハ薩州の海門ケ嶽なるべしと云又一説海門ケ嶽なるべしと是的説也嶽ハ嶽も有べし蝦夷の云へる近く見えけるとゝ云へる必定なるいまだ成べし



昆布多き所にて昆布にて民屋を葺き居住せり日本人も初めハ昆布と云事を知らざりけるが後に是を知て屋根をめくりて美しく食しけり日本松前の昆布ハ蝦夷に繁茂して東北夷海を経て朝鮮海に連て生じたるなりしかも咸鏡道に多く生じたと云斯其間遠遠なれども土地水脉連続せるが故なるべし

清正ハ後藤次郎を郷導として初め九日路にて来りて近路を経て五日路にて元の鏡城に凱軍あり夫より鏡道と打立數日と経て安邊に著陣し暫く軍勢を休め居らるる處に浮田秀家兵石田増田大谷の三奉行連署の飛札備前の家士三騎早追にて持来て大明の援兵来て朝鮮軍勢共氣を得爰彼こゝに起て王城頗る迷惑に及ぶと清正も

早く引返すべしと合さべしとなり

韓記曰、清正出兵于女直境、剽掠村里、屢矢、犯城于金山、使加藤與三右衛門其兵三千守之、又一城築于橘中、使九鬼四郎兵衛天野助左衛門山内甚三郎其兵三千守之、清正到咸鏡道、御人民以撫育之恩、屢與酒肴以悅之、依是人皆懷之、時群盜蜂起、障塞清正歸、金山浦後路、故王城諸將欲召清正、浮田秀家使其家臣三人裁連署之書遣于清正、而速召之、清正答曰、吾亦欲之、然豈可弃金山橘中兩城之軍兵乎、并合彼兵而歸、王城耳、清正即發自咸鏡道、使齋藤立本庄林隼人龍造寺又八郎其勢五千先進迎與三右衛門、



清正亦繼發、既而齋藤立本庄林隼人等到金山、時群盜大起、重圍金山、立本隼人見之、揚鞭勵兵、攻擊甚急、群盜敗走、死傷者尤衆、立本入城中、問與三右衛門如何、答曰、與敵兵相逢、奮戰而既死矣、立本隼人聞憐之、火其骨而歸、其後清正率兵攻群盜悉平、之合金山橘中之城兵而歸王城、清正早速安邊、打立三日目、長橋、著陣有、此處ハ鍋島加賀守直茂相良宮内少輔頼定在陣、平途、出迎ハ、煮て陣城と投け置て、是、在陣、治て、直茂申さる、清正大ニ喜び、扱加藤鍋島の士卒、の城、一手、分け、龍め置れたるゆゑ、清正直茂、城、と明け長橋、来

るべき由美國ある此時北地ゐても朝鮮勢處くゝを聚アと日本勢を打留んと道路を塞ぎ拒ゝけるに清正の士加藤清兵衛加藤傳藏片岡右馬允直茂の士鍋島孫九郎成隅十左衛門龍造寺七郎左衛門以下の一騎當千の剛の者共朝鮮勢を駈破アゝ肩長槁ゝを馳せ来アるゝ小於て主計頭清正加賀守直茂宮内少輔頼定生捕の西王子以下を率ゐ總軍異儀無く十六日目ゝ王城ゝ普陣せゝしゝ清正西王子を捕ゝ王城ゝ歸アるゝ由即ち書を馳せて名護屋ゝ注進を遂らるゝ大閤大ゝ怡悦あゝ主計頭が勲功拳て等ふべるべと云ゝども今度の戰功ハ異國ゝて其國王の子と西人迫生捕たる事以類なゝ本柄賞ゝるゝゝ猶あゝアと有アとて吹毛斜なるべゝて感狀ゝ添て吉光の脇指并ゝ黄金五百両褒美ゝて賜ひゝて清正の武功感賞せゝ者ハ無アゝゝ一書ゝ曰此軍行や朝鮮の國妃と王子と與ゝ落去る侍女頭ゝ一物を係て覆面せゝて其一物凡一尺計アて蓋一牛の脯也と云て朝鮮人牛肉を賞翫せる事甚アと象晋紀聞ゝ曰州牧使府使府使管兵使水使ゝ堅き制度あ京中ゝて一日ゝ牛三十頭計郡郡守縣令縣監縣令ゝ一日牛二頭十頭計アて北土の交易ゝ生中五六百頭又各鎮鎮兵ゝ成ゝて月二三頭て屠て賊く牛と屠る者を白丁と云監官と云る内ゝて牛の吟味後あゝて恐て私ゝ殺し者賊銅の罰あゝと云く和館ゝて館守一代官三代官通詞以下迫歳末の祝儀の東備ゝ判事共ゝて牛の脯ゝ贈る鶏林の牛肉萬國ゝ勝れしゝ云和館中の家僕ゝ交易して都會ゝて

敗く各丸茶くして服し脾腎の要策補虚の良方よりて乃ち晋くせの知れる家なり近時江戸屋敷の村氏よりて施し出したもの　其功著し　清正の先駆将よ此を捕へむとして清正曰顔面を視る事勿れ侵し掠る支勿れ鰐把を支勿れと知らぬ体にて飲食を與へて逃去らしむ　努く不沙汰有で〻〻と堅く知せ〻しかるゆえ士卒も命を守て知らぬ顔にて食物を與へ一已の心任せる逃去らしめ朝鮮人ども清正乃驍勇を鬼神の如く畏れ怖せるの且又其情けあるを深く感じたるなり也

**朝鮮**　日本勢咸鏡道よ乱れ入両王子敵の軍中よ陥る従臣金貴栄黄廷彧黄赫及び奉道咸鏡の監司柳永立北兵使北兵馬節度使咸鏡道ニ南北兵馬節度使と韓克誠等も皆執てらるゝ北兵使南兵馬節度使李渾ハ走て甲山小至りて朝鮮の土民の為よ害せられ南北道の郡県皆敵軍よ陥没せらる倭学通事咸廷席と云者あり京城よ在けるの日本の大将清正の為よ生捕られ同く清正よ随て北道迫入りの敵軍退いて後逃て京城よ還り柳成龍よ対面して北道の事を語りの頗る詳なり抑清正ハ敵将の中よも尤勇悍にして善く闘ふ平行長と同く臨津よ渡り黄海道安城駅よ至り二手よ分て攻入らむと謀りて行長ハ平きと決定なりしけれハ両将竜と行長ハ平